

ぼくに心を与えた二つの「海よ光れ」

4年 M・Tくん

今年の五月に宮城県東松島市にある震災復興伝承館に立ちよった。旧野びる駅は津波の被害でかん板や柱がゆがんでいて、改札は奥の方まで焼きただれていた。見たことのない津波の怖さが伝わってきた。すぐ目の前にある海はおだやかに光っていてきれいで、こんなところに大きな津波がおそってきたなんて信じられない。同じ海岸線に住む大沢の人たちにも大きな被害があったのだろうと想像した。家族をいっしゅんで失った子供たちがたくさんいたなんて、とてもつらい。

「海よ光れ！」を読む前のぼくは、震災にあった人たちは避難所で悲しみに包まれて、しずみこむ毎日を通していただろうと考えていた。避難所は、難題と人でぎゅうぎゅう詰めだ。しかし、つらい状況の中でも、悲しんでいるだけではなかったのだ。

ぼくがとても希望を持てたのは、子供だからできることがあるのだということだ。ゆうたくんはみんなの元気を出すために、新聞を作ろうと決心した。意志の強さをとてもえらいと思った。そして、執行部のみんなの実行力と団結力がすばらしかった。大人並みの作戦会議の様子に、ぼくも新入生のように圧倒された。人の目をひきつける見出しに、細かいイラストなど、ぼくが小学校で新聞を作った時に足りなかったことだった。これが内閣総理大臣賞をとった新聞なんだと感じた。

自分たちで一軒一軒に手渡して感謝を込めた新聞を配っていく。震災に負けない、あきらめない心が心底かっこいいと思った。ぼくは小さな日常でいつもくじけている。ずっとあきらめてばかりの心は恥ずかしいと思った。

オリジナル劇「海よ光れ」は、負けない心のために毎年伝えられてきたに違いない。歴史をこれからの子どもたちに伝えていくことは大切なんだ。あきらめずに前を向いて助け合う力。今を生きるぼくにも、教えてくれた。